

月光の影（第三回）

高岡啓次郎

先回までのあらすじ

静岡県浜松市出身の結城慎一郎は音楽家の父をもち、幼いころからピアノの音色が耳にやきついている。父親は息子と妻の前でしばしばベートーベンの『月光』を奏でていたが、同じ曲を愛人宅でもひいていた。その調べは、どこか陰鬱な記憶を呼び覚ます。結城は長じて北海道に渡り酪農大学の教授になる。学術的な発表や、エッセイを書くうちに名前が知られ、やがて小説家としてデビューする。大きな賞をとったのをきっかけに大学を去ったが、生活のために講演活動やセミナーの講師などで飛び回るうちに書くことへの情熱が枯渇し、自分の才能にも限界を感じ始める。

しかし浪費家の妻にせっつかれるように、すぐ金になる仕事を引き受けていた。彼には焦りがある。同じころにデビューした学友が押しも押されもしない流行作家として成功していることに妬みの気持ち

を禁じ得ないのだ。そんなおり、北海道の長沼で講演をしていたとき、元の教え子に出会う。酪農家でありながら密かに小説を書いていたが末期癌におかされていた。この青年は尊敬していた結城に自分の作品を読んでもらうことを依頼する。

それは多忙な彼にとつて嬉しいことではない。教え子の作品だからと、しぶしぶ読みはじめたが、結城の衝撃は半端ではなかった。そこに天才を見出したのである。激しい嫉妬を感じた結城は原稿を貪り読むが、周囲の誰にもそのことを話さなかった。まもなく結城の文体が変わる。その教え子が亡くなり、その死とともに結城はその原稿を封印してしまう。

やがて、ふとした手違いから妻の手によつて出版社に送られた青年の原稿が結城のものとして脚光を浴びる。結城が訂正することをためらっているうちにひっこみがつかなくなっていく、結果としてその作品を完全盗用することになってしまう。彼は一躍文壇のヒーローとなるが、自らの良心にさいなまれている。

七章

離婚が成立してから一年後、イギリスのヒースロー空港に到着した飛行機の中に結城慎一郎がいた。隣の席には付き添

いの看護師に見守られた八歳の盲目の少女がいる。黒髪が肩までたれていて、血の気のない瘦せた頬は涙で濡れている。それは亡き高梨春樹の娘である美奈子だった。

結城は咲江と別れてから『リラの家』にいた女の子を養女に迎えた。いくつかの手続きを経てその子は結城美奈子になったのである。イギリスに来たのは、ロンドンの王立病院に美奈子と同じ症例で視力が回復した患者がいることを聞いたからだだった。その後、二回の手術を通して少女は視力を取り戻した。結城はいつ死んでもいいと思えるほどの幸福感に満たされ、これからはこの子のために生きていこうと心に誓っていた。自分にできる贖罪といえはそれくらいしか思い当たらなかった。

それまでは絶えず死を意識していた。とりかえしのつかない盗作に身をゆだねてしまい、書くことそのものに吐き気をもよおす自己嫌悪がつきまとったからだ。結城はかろうじてその思いを断ち切り、高梨春樹の遺児を救うことに人生の目的を集中させたのだった。美奈子の視力が戻ってからも、二人はそのまま五年間イギリスで暮らした。結城は小説の発表をやめ、おもに学術的な論文や書評を書いたり日本人学校の講師をしたりして生活費をまかない、講演や表立った舞台からは完全に遠ざかっていた。

結城は汚れなく成長していく美奈子を見るたびに、自分が高梨春樹の書いた『さざなみ』を盗用したことを悔やみ続けた。相変わらず売っていたその本の収入をすべて美奈子のために使い、あらゆる教育を彼女に施こそうとした。しかしど

んなに娘のために多くをなしても、その行為が偽りの延長に思えてならなかった。自分がしてしまったことを打ち明けようとなんと思っただか分からない。しかしそのたびに、生きがいとなっていた美奈子を失うのが怖くて言い出せなかった。

その後、二人はアメリカに渡った。美奈子が現代絵画に関心と才能を見せてきたことに気づいたからだだが、ニューヨークに家を借りて娘を学校に通わせると同時に、才能ある現代美術の画家に頼んで教育にあたらせた。

浜松に結城の作品の記念館を作る話がでたのは美奈子が十七歳になった年の秋だった。結城はくりかえし記念館建設に反対したが、地元では本人の意志とはうらはらに計画が着々と進んでいた。皮肉なこととその計画を誰よりも喜んだのが美奈子だった。彼女はその申し出を受けるよう父親に強く勧めた。結城はなおも同意を渋っていたが、地元の文学館を兼ねるといふ話に押し切られて、やっと首を縦に振った。

浜松の会場で美奈子の洗練された立ち振る舞いと美貌は皆を魅了した。マスコミは久しぶりで帰国した結城とその娘のことを好意的に大きく取り上げた。事実この祝賀会は、まるで美奈子を日本に紹介するために催されたかのようなだった。

結城本人はそのことを喜んでいて。盲目に打ちのめされていた少女が今こうして生き生きと活動している。知性も美貌も、どこへ出しても恥ずかしくない娘に成長したことが嬉しくてたまらないのだった。

記念館建設式典の翌日に二人は旭川に行った。美奈子の母

と祖母の遺骨を預かっている寺に行き、事前に頼んでいた墓を建立するためだった。小高い丘の上に墓石は建てられた。そこからは峰々に初雪をうつすらとのせた大雪連峰を見渡すことができた。二人はその後『リラの家』に立ち寄った。美奈子は自らの目でそこを見るのは初めてだったので驚きと興味で興奮しどうしだったが、もつと驚いたのは昔からここにいる職員たちだった。

「ええ？ あんたがあのとときのミナちゃんかい？」

「信じられない！ こんなに綺麗になって」

「話には聞いていたけど本当に見えるようになったんだねえ」

そんな驚きの声があちこちから聞こえた。子どもたちは自分たちの先輩にあたる美奈子に甘えるように絡みついた。その中には何人かの盲目の子どもたちがいる。美奈子は彼らを涙ながらに抱きしめた。結城はたくさんの寄付と子供たちへの贈り物を置いてそこをあとにした。

そのあと結城慎一郎が美奈子を連れて行ったのは長沼だった。そのこの街外れの丘には高梨春樹が眠る墓がある。時刻はすでに夕方になり、曇り空は重くなりつつあった。茂った樹木の薄明かりの中を通り、湿った芝生を踏みながら二人は霊園を歩いた。

微笑みかける美奈子に結城は心ならずも笑顔を返したが、抜けきらない心のしこりがますます重く圧しかかってくる。墓前に立つたとき、力が急速に身体から抜け、前につんのめるようにしてよろめいた。娘に支えられ、体勢を整えて

から、結城は敵かな水気のない声を出した。

「美奈子、これが実のお父さんである高梨春樹さんとお婆ちゃんのお墓だよ」

白い御影石が秋の陽ざしを受けて鈍く光っている。美奈子は花束を置いたあと、小さな墓石に片手をかけて墓碑銘を口に出して読んだ。

「高梨春樹、享年三十四歳。高梨ミヨ、享年七十三才。父はずいぶん若くに亡くなったのね」

「本当にそうだな」

結城は大きく息をはいた。

「立派な人だったぞ。おまえの両親はお互いが嫌いで別れたのではないんだ。都会で育ったおまえのお母さんが体調を悪くして、どうしてもここで酪農を一緒にしていけなくなったんだよ」

美奈子は、おぼろげに覚えている父を思ったのか、あるいは、離婚してからの母親の苦勞を思い出したのか、潤んだ目頭にハンカチをあてた。

「さあ、お父さんに挨拶しなさい」

美奈子が瞑目するのを見守ってから、結城は墓前にひれ伏したが、やがて肩を震わせて慟哭し始めた。抑えられない言葉が胸からあふれでる。美奈子は只ならぬ様子が心配になり父親の肩をさすりながら尋ねた。

「どうしたの、お父さん？ なぜそんなに泣いているの」

結城は立ち上がり、冷静さをつくりながら答えた。

「何でもなしよ。ちよつと思ひ出したのさ」

「何を謝っていたの」

「いろいろあつてね。いつか話すよ」

墓参の帰り道、高台から石狩平野が一望できた。落日が、先ほどまでのうす曇りの空を茜色に染めはじめている。その眺めは巨大な中世の宗教画を見ているように荘厳だった。美奈子は丘を下りながら感嘆の声をあげた。

「なんて綺麗なところでしよう。素敵よね、お父さん」

「素晴らしいな、心が洗われる風景だ」

「わたし、こんな景色を眺めながら暮らしたいなあ」

「そうか……」

結城は美奈子の肩に手をおき、

「いつかそうしよう」とつげた。

「きつとよ、お父さん」

「分かった、約束するよ。でも今はアメリカでせっかく受かった大学を卒業するまで頑張るんだ。油断していると落第させられるぞ」

「分かっているわ。こう見えてもわたしは成績がいいんだよ」

「そうだろうな、おまえが優秀なのは知っているよ」

「分かればよろしい」

美奈子は上目づかいにいたずらっぽく目をして唇を噛んだ。結城には夕日に照らされた収穫を待つ稲が燃える炎に見えた。赤みをおびた金色の光に臉を細めながら心に誓うものがあった。最初のころは何に突き動かされて行動しているのかよく分からなかったが、今ははつきりと見える。この愛しい

娘のために残りの人生の全部を捧げよう。自分は訪れる夜闇に包まれて確実に消えて行く運命にある。だが、この子は明るい光の中で洋々と歩いて行く権利があるのだ。そのためにできることすべてをする。拳をにぎり、唇をかみしめながら結城はそんな決意を強めていた。

浜松での記念館建設式典から五年ほどの歳月が過ぎたころ、アメリカでの生活を離れて日本にひっそりと帰国していた結城と二十三歳になった娘の美奈子は長沼の小高い丘の上に口グハウスを買って住んでいた。その建物は高梨春樹の墓参りの帰り道、二人で眺めた場所のすぐ近くにあった。そこは長沼から由仁に抜ける坂の途上にあり、カラマツ林や群生した柳に囲まれ、熊笹の葉ずれの音が絶えない風通しのいい空間だった。

西側の窓からは石狩平野が一望できる。樹木がさわやかな影をつくり、その葉むらを通して太陽が昇り、夕方になれば平野の光を一点に集めたみたいにペランダの窓を赤く染める。熊笹のツヤのある葉が西陽を反射し、月見草や野菊がその中で優しく揺れる。その様子は北国のメルヘンを凝縮した場所だった。そんな環境で美奈子は結城に見守られながら心ゆくまで作画にふけた。

ある秋の朝、二人はコーヒーを飲みながら窓辺に立つて広大な平野を眺めていた。はるか遠くまで稲が収穫を待つまでになっている。びっしりと実った黄金色の穂は今年が豊作であることを物語っていた。すでに六十代の後半にさしかかっ

ている結城の髪はすでに真つ白だった。秀麗な雰囲気を残しながらも深い皺が増え、ツヤのない頬や眼の窪みは年齢よりも明らかに老け込んで見えた。彼はしみじみと回顧するような口調で言った。

「早いものだ、美奈子と帰国してもう二年が過ぎたとは」

「あつという間ね。今年は忙しかつたわ。なんと東京へ行つたかしら。手当たり次第に作品をあちこちの展覧会にもちこんだもの」

「今年は幾つかのコンテストに入選したが、日美展で特別賞をとつたのは収穫だつたじゃないか」

「おかげさまです！」

美奈子は照れながら、垂れた前髪の隙間から眩しい目を向けた。

「それにしてもいい眺めだ。さすがは北海道有数の米どころだなあ。美奈子は知っているかい？ 今や北海道が全国で最大の米生産地なのを」

「そうなの？ 寒い所だから少ないと思っていたわ」

「昔は確かに少なかつたさ。でも今は改良を重ねてすばらしい米を安く大量に作れるようになった。その先駆けになったのもこの付近の土地なんだよ」

「ほんとにいい所ね。明日から一ヶ月ほど東京だけど、きつとすぐここに帰ってきたくなるわ」

ニューヨークで現代アートを研究してきた美奈子の斬新な作品は少なからずインパクトを与えた。突如現れた新進作家に世間は注目した。結城慎一郎の娘であるという知名度があ

つたのは確かだが、美奈子自身の才能が現代アートの新しい流れを作りつつあるとして話題になった。東京の由緒あるギャラリーで近日中に個展を開く予定になったのも、周囲からの評価が高まってきたことの証拠だつた。結城は煙草をくわえながら視線を壁に架かつた美奈子の絵に向け、考え深げに語つた。

「いよいよおまえにとつては初めての本場での個展だな」

「そうね、緊張するなあ」

「そうだろうな。何日から始めるの？」

「来月の第一土曜からなの。その前に打ち合わせや下準備が大変なのよ。東京のおもだつたギャラリーを訪ねたいし、関東を中心に、できるだけたくさん作品を見てくるつもり。モンドリアン、リキテンシュタイン、福島秀子さんの作品を生でじっくりと味わいたいし、ワイエスの作品も研究したいの。人間の情念をいちど凍らせて画面に固定したみたいなのがどうして生まれるのか知りたいわ」

「そうするといい。じっくり作品と対峙すれば何かが見えてくるだろう。ところで美奈子の作品はもう東京に送つたのかい？」

「ええ来週にもつくはず。お父さんも体調がよければ見に来てね。私が泊まるホテルの連絡先を二か所教えておくわね。フロントに言えば同じ部屋に泊まれるから安心して」

「分かつた。あとで連絡する。展覧会の終わるころに行くつもりだ。そうすれば一緒に帰って来られるかもしれないだろう。個展が終わつたらおもしきりお祝いしよう。美奈子の前

途は明るいぞ」

「ありがとう。でもやつと個展を開くだけだから、まだまだこれからね」

「そうだが、素晴らしいじゃないか、よくがんばったよ」

美奈子は結城が喜んでくれているのが何よりも嬉しいいとなんども口にした。日本に帰ってからというもの、自分のことはさておいて娘のために奔走してくれたことを身にしみて感じているようだった。もはや結城にとつてはそれのみが生きがいだった。美奈子の役にたち、彼女を立派に一人立ちさせることが何にも増して優先されるべきものだった。

翌日、美奈子は東京に旅立った。空港まで娘を送ったあと、結城はいつものようにペランダ越しに石狩平野を眺めていた。結城の身体に明らかに変調が現れたのはそのあとだった。はるか遠くの藻岩山とその背後にある連峰を見ていたとき、急に目がかすんできて頭痛を覚えた。いつにない疲れを感じてまともに立つていられなくなった。倒れこむようにベッドに身を投げ出し、食事を摂ることもなく朝までそこから出られなかった。

その後の数日間で、結城は自分の体調に尋常でない変化をはつきりと感じとつた。少し歩いただけでも息切れがひどく、後頭部が普通でない痛みを訴えていた。耐え切れなくなった彼はすぐにタクシーを呼んで長沼M病院に行った。

検査がなされ緊急入院となった。脳の断層撮影に気になる影が小指の爪ほどの大ききで見つかったのだ。医師の説明によると、老朽化した当病院の設備は限られているので、さら

なる精密検査のため札幌の大学病院に移ることを勧められた。望むならすぐに手はずを整えるという。

結城はその勧めに同意する以外に選択の余地はなかった。いま倒れるわけにはいかないのだ。当面の目標は娘の本格的なデビューともいえる東京での個展を見に行かねばならない。美奈子も自分が来るのを望んでいるはずだ。しかしそれだけではない。もっと重要なことのために生きていたかった。自分が高梨春樹にしてしまったこと、世間を欺いてきたことを何らかの形で清算しなければならぬのだった。

しばらく眠ったあと、いくらか気分が楽になった結城は、おぼろげな視線で自分が横になっているベッドとその周辺を眺めまわした。そこは医師が認めていたとおり、いかにも老朽化した病室で、古い天井や窓枠も長いあいだ塗り替えられていないに違いなく、色あせ、はげかかったペンキでおおわれていた。

心に激しい戦慄が走つたのはそのときだった。その病室には見覚えがあった。思わず息を呑んだ。そこは偶然にも、二十年ほど前に亡くなった高梨春樹が入院して横になつていた場所だったのだ。その人の遺児が今は自分の娘になつている。結城は運命の巡り合わせと、逃れられない罪にたえず付きまとう影におののいた。

眠れない夜のまどろみの中で、結城は誰かが自分のベッドの隅に背を向けて座っているのを見た。それは首筋が土色の肌をした背中丸い痩せた男だった。やがて男は静かに振り向いた。その顔を見たとき結城の血は凍りついた。

「ああ、君は高梨君ではないか」

青い炎をたたえた眼光鋭い男が、薄明かりの中でじつとこちらを見つめていた。

「そうなのだね？」

男は黙したまま唇をかすかに動かしたが音にはならなかった。結城は恐怖のあまり体を少しでも後方にずらしながら、逆に右手を前にさし出していった。

「本当にすまないことをした。許してくれ」

男は静かにうなずきながら、壁の向こうに吸い込まれていった。そのとき、暗闇の中で目が覚めた結城は喘ぐようにつぶやいていった。

「来るべきときはとつくに来ているのだ」

そのまま朝までまんじりともせず考え続け、もはや遅すぎた感が否めない一つの覚悟を固めた。すべてを告白しよう。美奈子に、そして世間に対しても。

翌日の午前中、結城は札幌の北大病院に搬送され、その日のうちに高性能のMRIで精密検査が行われた。医師は面談のとき、著名な人物として知られていた結城にどう説明しようかを整理しかねている様子だった。画像を見ながら口を開きあぐねている医師に、結城は自分のほうから質問した。

「先生、私の体はどうでしたか？ 今日娘もおりません。私に包み隠さず教えてください」

医師は回転椅子の上で体をゆすり、少しのあいだ考えていたが、意を決したようにうなずき、MRIの結果を話し始め

た。

「結城さん。どうか落ち着いてお聞きください。実は、脳の中央部に腫瘍が見つかりました。まだ小指の爪ほどですが大きくなったら非常にまずい箇所です。小さいうちに取りましよう。かなり手術しづらい場所にありますので急いだほうがいいと思います」

「そうですか。分かりました」

結城は他人事のように答えた。彼は驚くほど冷静だった。大きく息をついてから言葉をついだ。

「それで先生、率直に教えてください。私はいつまで生きられるでしょうか」

「それは何とも申し上げようがありません。今後どのくらいの速さで腫瘍が成長を続けていくかが問題です。半年とも一年とも予測しかねます。ただ、このままにしておけば確実に命を脅かすでしょう。今回のような事態が頻繁に、さらに深刻度を増して襲ってくるでしょう。緊急に対処なさるべきです」

「娘と相談させてもらいましょう。処理しなければならぬ仕事もありますので、いつ入院するかを近日中に連絡させてもらいます」

患者の側から入院日を知らせるといふ、奇妙なほどに冷めた言い方に若い医師は驚きを隠せないようだった。

「結城さん、そんな悠長なことを言っている場合ではありませんよ。お急ぎになったほうがいいです。本当はこのまま入院されるほうが賢明ですが……」

「いいえ、今日は帰るとしましょう。やり残したことを片づけなければなりませんので」

あつげにとられてゐる医師と看護師をしり目に、すつくと立ち上がった結城は早々に診察室を出た。

長沼に帰った結城はその件で美奈子に電話をすることはしなかった。初めての東京での個展は将来を占う重要な里程碑になるはずだ。それを少しでも妨げるようなことがあつてはならないのだ。美奈子がいない今こそ自分にはすべきことがある。急いでワープロを取り出して原稿を書きはじめた。寝る時間も惜しんでいっしょに書き進めたのだ。それが告白小説『月光の影』だった。

数日後、病院側から連絡があつたにもかかわらず結城はそれに応じようとしなかった。美奈子は許さないだろうが、彼自身はもはやどんな治療も受ける気になれなかった。だが、その考えをあからさまには言わず、もう少ししたら伺いますと答えて、入院話を先へ延ばそうとした。責任感の強い医師から直接に電話があつたときには、こちらから連絡するまで待っているようにと語気を強めることさえした。結城の思いのすべてを占めていたのは「今はそれどころではない、早くこれを書き上げねば」ということに尽きていた。

個展のために旅立つた美奈子からは夜になるとかかさず電話があつた。もう七十歳に手が届こうという父親を氣遣つてのことに違いなかった。その電話は短いものがほとんどだが、ホテル内でのたわいのない話題や東京での展覧会にかかわる

エピソードを簡潔に話してはおやすみを言うのだ。しかし緊急入院した日の夜は家にいなかった。翌日の夕方、医師のすすめを無視して帰宅したときに受けた電話は老齡の親を持つ誰もが感じる心配を美奈子が表したものだつた。

「お父さん昨日はどこへ行つていたの？ 夜遅く電話に出ないから心配したじゃない。私がいなくなつて急に夜遊びを始めたのでしょうか」

「家で酒を飲んでぐつすり寝入つてしまつたのさ。電話が鳴つているのは分かつたが出られなかつた」

そうはつくろつたものの、結城の声はいつにも増して生気がなく、ひどくしわがれていたのは隠しようがない。

「なんか声が変わよ。具合が悪いんじゃない？」

「いや、そんなことはない。疲れているだけだよ。久しぶりに書き物をしているからね。——ところで個展の準備は順調なのかな」

「大丈夫よ。ギャラリーの担当者がすごく親切なので助かる。ただ、しつこく食事に誘おうとするのにはまいつたわ。明日は早いからそろそろ切るね。また電話する。おやすみなさい、お父さん」

「おやすみ。忙しいだろうから毎日かけてこなくていいぞ」
「平気よ、夜は暇だから。じゃあね」

屈託のない声に結城は癒された。それと同時に、この娘に言えなかつたことをいよいよ何もかも話さねばならないと心に誓つた。自分の命があるうちにそれをしなければならぬのだ。

朝から晩まで結城は脇目もふらずに書きつづけた。自分が一人の作家としていかにしてはいけないことをしたか、自分が誘惑に負けてしまうにいたった深層心理を克明に記した。己の保身に對する狡猾さや、友人や後輩に對する嫉妬、その間の葛藤や苦しみを赤裸々に綴った。彼は二週間で三百枚の原稿を完成させたが、それに加えて美奈子への詫び状と遺書を書きあげた。

美奈子の個展も残す日がわずかとなった。結城は体調の優れない自分を鞭打つて新千歳空港に向かった。朝から冷たい風が吹きぬけている。季節はもう秋の終りで、刈り取られた稲原に野鳥たちが時を惜しむようにせわしく虫をついばんでいた。タクシーをおり、肌寒さに身を屈めながらおぼつかない足取りで空港ロビーに入った。

手続きを終えたあと、日ごろの睡眠不足が一気に表面化した。頭が半分覚醒しないまま、ロビーでも機上でも暇さえあれば貪るように眠ってしまったのだ。それは必要な眠りであつたらう。娘の晴れ舞台ともいえる場でさえない自分を見せるわけにはいかないのだつた。

羽田に着いたあと、タクシーに乗り込んで目的地を告げてもうからは運転手に教えられるまでどこをどう走つたものかいつさいの景色を見る余裕もなく眠っていた。すれ違つたパトカーのサイレンで、慌てて時計を見ると三十分ほどタクシーに乗っていたことが分かつた。個展会場があるビルを訪れたときは、すぐに一階の洗面所に入った。冷たい水で顔を洗つ

て自らを覚醒させた。手足を上下させ血の巡りをよくする。飛行機の乗り降りでもかなり体力は消耗していた。鏡に自分を映し、髪や身支度を整えてからエレベーターに乗り込んだ。個展が開かれているギャラリーは六階にあるはずだ。

そこは狭い空間だつたが、床に素焼きのテラコッタが貼られ、壁や天井に埋め込まれた間接照明も手が込んでいて、いかにも高級な雰囲気のあるギャラリーだつた。メイン会場には仄かな絵の具の匂いがした。歩を進めると女の化粧の香りもする。見ると二十点ほどの作品の前には派手な服装をした七、八人の婦人たちが批評しながら絵を取り囲んでいた。

婦人たちの中央に紺のスーツを着た、ひときわ背の高い美奈子がいた。質問に答えながら何かを説明しているようだつた。入り口の近くで結城が所在無く立っていると、それに気づいた美奈子は長く会わなかつたかのような親愛を込めた表情で迎えた。

「まあ、来られたのね」

婦人たちにお辞儀をして話を中断し、駆け寄つてきた。

「お父さんどうもありがとう。遠いので無理だと思つていたのよ、嬉しいわ」

「ああ来たとも。だつて約束したじゃないか」

「ええ……」

「たくさんの人がみえているようだね。おめでとう」

「ありがとう。予想の倍も集まつたのよ。絵を買いたいという方も五人ほどいらしてね」

「そうか、おまえもいよいよ本格的にプロの画家だな」

「ま、たまだよ。だって生活費のほとんどをいまだにお父さんにおんぶしているんですもの」

「軌道に乗るまでは時間がかかるさ。何だつてそうだ。焦らないでやりなさい」

「どうもありがとう。もう少しのあいだ甘えさせてもらいます」

そういつて美奈子は結城を座らせ、温かい飲み物を与えた。それから再び婦人たちの中に入ったが、父親が結城慎一郎であることを知っている何人かが視線を飛ばして噂をしているのが漏れ聴こえてきた。彼女たちがいるあいだは落ち着かない、どこかいたたまれない気がしたが、婦人たちが退散してからはゆつくり作品を楽しむことができた。

美奈子が得意とする独特なブルーのグラディエーションは都会の摩天楼をデフォルメしたものだというのが、画廊のやわらかな照明の下に置かれるとひときわ格調高く部屋の空間に溶け込んでいた。

「お父さん、今日は私の泊まっているホテルに行きましよう。ここからも近いから早めに行つて休んでいてね」

「ありがとう、そうさせてもらうよ」

すぐに美奈子はホテルに電話を入れた。結城は一時間ほどをそこで過し、ひと足先にホテルにひきあげた。その日の夜は最上階にあるラウンジバーで二人はささやかな祝杯をあげた。結城は幼子だった美奈子と出会った二十年を記念してその時代のワインを用意させた。美奈子は味わい深いワインを口に運びながら、東京の夜景を、身を乗り出すようにして見

下ろしたあと、考え深げに口もとをほころばせた。

「こうしていると、思い出すわ。ロンドンで、手術が終わつて見えるようになったとき、病院の窓からの夜景がたまらなく綺麗だね。最初はもやがかかったみたいなき感じだったけど、日に日に鮮明になつていくのが分かったの」

「あのときは嬉しかったな。夢のようだった」

「わたし、お父さんの顔をいろいろ想像していたのよ。小さかったとき保育園の外でいじめられたとき助けてくれたものね。あのときの優しい顔をずっと覚えていたから」

「美奈子はプレゼントをくれたな。覚えてるかい」

「何かしら？ そんなのあげたかな」

「ああもらつた。それは小さなピンク色の貝殻だ。光にかざすと虹色に光るやつだった。おそらく美奈子が宝物にしてたものだろう」

「ああ分かつたわ。お母さんがくれたものよ」

「父さんは今でも持つている。書斎の物入れに大事に置いてある」

「まあ驚いた。あのときの貝をずっと持つていたの？」

「そうさ。記念だからなあ。そのあと、いろんなことがあつておまえが私の娘になつた。不思議なものだ」

「ほんとにねえ、わたしは両親を早くに亡くしたけれど、お父さんの娘になれて幸せです。ありがとう、ごさいます」

そういつて美奈子はまじまじと結城を見つめた。ラウンジの仄赤い照明が大きな瞳に映っている。小さな唇をキッと結んだ生真面目な表情は幼い時から見慣れているものとは違つ

て別人がいるようだった。結城はたじろいで視線をそらした。「そんなふうに見られたら照れるじゃないか。あらたまつて言われると、どこかに逃げたくなる」

「だってほんとなんですもの」

少しして思い出した。そのときの美奈子の表情はしばらく忘れていた美奈子の母親の顔だったのだ。年代は今の美奈子より十歳ほどは上だったに違いない。保育園の前に迎えに来たときの凛とした姿が昨日のことに浮かび上がってきた。

その直後、結城は真剣な眼差しを美奈子にむけた。急に場面が変わった映画のようであつたらう。美奈子もすぐに変化を察知したようだった。ふたりの間にさつきまでとは異なつた空気がながれた。今すこし前まで親子に注いでいた穏やかで明るい光がどこかへ飛び去つていた。

結城はかすかに震える口を開いた。

「個展も明日で済みだな」

「ええ、あと片づけが大変だわ」

「美奈子、よく聞きなさい」

真剣な結城の言いかたに美奈子は叱られるときの子ども表情になつた。

「いいかな、創作者にとつて最も大切なことのひとつは自分を信じ、自分自身の個性を何よりも大切にすることだ。それが一番の宝なのだから。いいね、自分を信じるんだぞ。これはなかなか簡単なことではない」

念を押す言い方に美奈子は「肝に命じます」と神妙に答え

た。

「びっくりしたわ。何か怒られるのかと思つた」

美奈子は上目づかいに父親を見つめて笑つた。結城は再び乾杯する姿勢をとつた。それにこたえてワイングラスを握る美奈子の白い指が空中に浮かんで見えた。その向こうに早世した若い男女がぼんやりと佇んでいる。結城の視線はかすんでいた。

いま見ているのは自身の内奥だろうか。結城は、かつての自分に必要だつたことを娘に語つたに過ぎなかつた。そうしていれば、こんなに苦しむことはなかつたのだ。このワインが地下で眠つていたのと同じ年月のあいだ、否応なく熟成された心の痛みがあるのだった。それを隠しながらグラスに口をつけた。喉もとに流れるほろ苦い液体に身をまかせながら考えていた。——これがおそらく最後だろう。美奈子と親子としてこんな心の通い合つた時間を持つのも、まもなく終わりになるのだ。

北海道に帰つたら娘に『月光の影』を渡し、詫び状と遺書を同時に添えるつもりでいる。当然ながら美奈子は激怒するだろう。そしていままでの自分への好意もすべて偽善とみなすだろう。こうして微笑み合うことはもちろん、口をきくことさえなくなるだろう。世間の評判はもはやどうでもよかつた。ただ美奈子の落胆と絶望だけが恐ろしかった。それを想像するだけで生きた心地がしなくなる。残酷な告白がもたらす悲劇の確実性に結城は身悶えした。

（八章に続く）